

高齢・障害・求職者
雇用支援機構理事長表彰

優秀賞

高度な専門性とノウハウを継承するために新会社を設立 高齢従業員が生涯現役で働くことができる職場を実現 アイエム翻訳サービス株式会社

(大阪府大阪市)

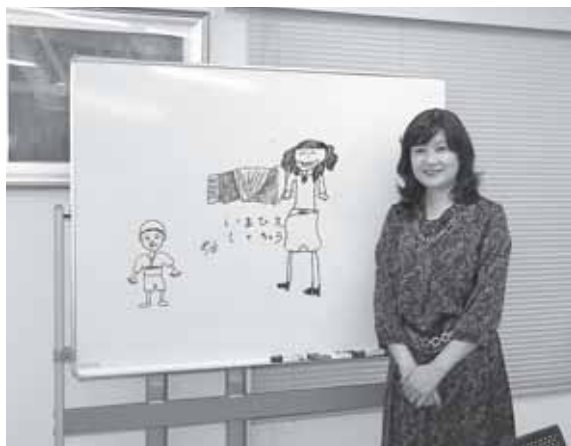
I 本事例のポイント

- アイエム翻訳サービス株式会社** (大阪府大阪市)
- ◎創業 2016 (平成28) 年
 - ◎業種 専門サービス業 (医学・薬学分野の翻訳・学術情報支援)
 - ◎従業員数 10人
(内 訳) 60~64歳 4人 (40%)
65~69歳 3人 (30%)
 - ◎定年・継続雇用制度
定年65歳。希望者全員を再雇用により、年齢の上限なく再雇用。現在の最高齢者は68歳

アイエム翻訳サービス株式会社 (新比恵智子代表取締役社長) の設立は2016 (平成28) 年3月。設立から1年に満たない会社ということになるが、同社の実質的な前身の会社 (以下、「前社」) は田辺三菱製薬グループの子会社で、研究開発支援会社として30年以上の歴史を持つ。その企業の流れを汲み、特に、翻訳事業における長年にわたる蓄積をもとに新たに設立された企業という位置づけになる。

前社の翻訳・学術情報支援部門は、ノウハウの蓄積と高い専門性に裏打ちされた高品質なサービスを提供することにより、取引先からゆるぎない信頼を獲得し、業容が徐々に拡大、ここ数年の業績は過去最高であった。ところが、田辺三菱製薬グループの組織改変にともない、前社は2016年3月の事業休止を余儀なくされた。そこで、前社の有志が中心となって新会社の設立を図り、長年の経験とノウハウを引継ぐことになった。その際、高齢従業員を中心とした従業員が、より専門性を発揮して長く働くことができるように、社内制度などの充実を図った。

- 本事例のポイントは次のとおり。
- (1) 前社の親会社の子承のもと、有志が新会社を設立して、ノウハウと高い専門性を引き継ぎ、豊富な経験を持つ高齢従業員のための職場を創出した。
- (2) 前社では60歳だった定年年齢を65歳に引き上げた。また、定年後の継続雇用についても、上限年齢のない再雇用制度を導入した。
- (3) 従業員のワーク・ライフ・バランスを意識した柔軟な勤務体系として、60歳以上の従業員と小学生以下の子どもを持つ従業員を対象に「時短制度」と「在宅勤務制度」を導入した。
- (4) 高齢従業員にとって身体的・精神的に負担の大きい通勤時の負担を軽減するために、同社設立とともに、大阪本社と東京支社を通勤時の利便性の高い場所に設けた。



新比恵智子代表取締役社長

II 企業の沿革・事業内容

同社の前身は、田辺三菱製薬グループの子会社「株式会社田辺R&Dサービス」の翻訳・学術情報支援部門（文献情報部）であり、約30年前の1986（昭和61）年に田辺製薬の子会社の翻訳会社として設立された。おもに研究開発部門の出身者（管理職経験者や大学教員・講師などの経験者）が、定年退職後に同社に再雇用され、豊富な経験と高度な専門知識を生かして、翻訳や学術情報支援、英語研修などを通じて、主に親会社の各部門を支援していた。

2016年4月の田辺三菱製薬グループの組織改編を契機に、前社の全事業を休止することになったが、関係部門から翻訳部門の高品質なサービスの継続を求める声もあり、また前社の業務終了が取引関係のあるクライアントに迷惑をかけることを避ける必要も生じた。そこで、田辺三菱製薬グループの早期退職者優遇制度を利用して、親会社の了承のもと、新比恵社長（当時は文献情報部長）を含

む、前社の有志などが早期退職して社外に新会社を設立、前社のメンバーの雇用とともに、過去のノウハウを継承することになった。

2016年3月、同社は「医薬品の研究開発や医学・薬学に関する高度な知識と実務経験を活かし、各種事業を通じて、医薬品業界と翻訳業界の双方の発展に寄与する」をモットーに掲げ、新たな船出を果たした。現在の同社の主

な事業は、「翻訳・英文校正」、「論文の執筆と投稿サポート」、「学術情報資料の作成」、「研究者・翻訳者向け翻訳セミナー」で、なかでも「翻訳セミナー」は、同社が新たに開拓した業務。新比恵社長は、「今年8月に第1回目のセミナーを開催しましたが、製薬業界における翻訳のノウハウが満載で、たいへん盛況でした。今後も、受講者の要望をふまえ、関係者のお役に立てるように、この事業を通じて次代をなう人材育成や業界の発展に貢献したい」と話す。

III 高齢化の状況、職場改善などの背景と進め方

現在、同社の従業員数は10人（男性8人、女性2人）。このうち60代が7人を占めている（50代は1人、40代は2人）。平均年齢は59・8歳。大阪本社には6人、東京支社には4人が勤めている。

同社の各種事業には高度な専門性が求められるので、経験の浅い若手を採用することは現実的にはむずかしかった。このため、知識と経験を兼ね備えた高齢従業員に

少しでも長く働いてもらう必要があった。しかし、前社の再雇用期間は、親会社の再雇用制度を踏襲していることから、65歳が上限（60歳の者を再雇用した場合は5年間の雇用にかぎられる）のため、優秀な後継者の継続的な確保と業務の継続、ノウハウの継承が大きな課題となっていた。



アイエム翻訳サービスの東京支社



アイエム翻訳サービスの大阪本社

IV 改善の内容

(1) 新職場の創出

・新会社の設立

前社が事業休止となれば、高齢従業員の職場がなくなるので、こうした事態を防ぐために、高齢従業員に知識と経験を活かして働いてもらう職場をつくるために、前社の有志が新会社を設立した。新会社の設立にあたり、前社と親会社との間、あるいは前社と他社との間の各種契約における契約上の地位を同社に譲渡してもらうことになった。その結果、従来の業務と顧客をほぼそのまま継承することができた。

新比恵社長は「現状では前社から引き継いだ業務が大部分ですが、新たな顧客も開拓しつつあります。今後は前述したセミナーなどを皮切りに、医薬品業界と翻訳業界の双方に向けた2本立ての事業で社会に貢献していきたいですね」と将来に向けたプランを説明する。

(2) 制度に関する改善

・再雇用制度の見直し

前社では、定年は60歳、再雇用の上限年齢は65歳だった。そのため、会社と本人の双方が希望する必要な人材であっても、退職してもらわざるを得ず、業務委託契約を結んで、可能な範囲で協力してもらうしかなかった。

そこで、同社では、60歳未満の正社員の定年年齢を65歳に引き上げるとともに、その後は、本人が健康で業務を適切に遂行できるかぎり、年齢の上限を設けず、1年ごとの契約の更新で再雇用する制度を導入した。また、同様に、65歳を上限としていたパート社員の年齢制限を撤廃して、65歳以降も働けるようにした。さらに、すでに65歳で前社を退職し、個人事業主として業務委託契約を結んでいたスタッフ3人を再雇用した。

・時短制度、在宅勤務制度の導入

同社が手がける専門性の高い翻訳業務は、在宅で必要な作業を行うことも可能である。そこで同社

では、家族の介護や孫の世話をしている60歳以上の従業員と小学生以下の子どもを持つ従業員を対象に「時短制度」と「在宅勤務制度」を導入した。このうち、在宅勤務をしている高齢従業員は「通勤に時間がかかるため、朝は遅く出勤して、夕方は早めに退勤していますが、その分、就業時間に足りない部分は自宅での作業で補っています。通勤電車でも座れるので、体力的にも助かっています」と話している。

(3) 職場環境の改善

・オフィスの新設

前社は、大阪府大阪市内と埼玉県戸田市にオフィスを設けていたが、新会社の設立にともない、新たなオフィスを設ける必要があった。とくに戸田市のオフィスは通勤に時間がかかり、周辺環境も利便性が低いことから、新たなオフィスは、高齢従業員にとって身体的・精神的に負担の大きい通勤時の負担を軽減することを条件に場所を決めた。その結果、大阪本社は大阪市淀川区に、東京支社は港区芝浦にオフィスを構え、従業員からも好評を博している。



左から、高田博さん、岸哲哉さん、中島悟さん、齊藤亜紀良さん

V 高齢従業員の声

大手製薬会社の傘下を離れ、独自の道を歩む同社の設立の趣旨に賛同して生涯現役を貫く60歳以上の従業員3人と、現在は同社と業務委託契約を結んで仕事を続ける70代のスタッフから話を聞くことができた。

高田博さん(67歳)は、自ら翻訳を手がけるほか、外部の翻訳者が作成した翻訳のチェックを主な業務としている。高田さんは「クライアントの希望にかなったレベルの成果物を期日どおりに納めることを第一に仕事をしています。仕事でかわった薬が製品として世に出たり、医師の方々の論文が掲載されたりしたときが、仕事を続けてきてよかったと感じる瞬間です」と話す。前社から数えて翻訳業務の担当年数30年の高田さんは、現在週3日の勤務。「NPO法人理事長の仕事との折り合いをつけるために短日勤務にしてもらっています」と自らの働き方を説明する。

岸哲哉さん(73歳)は、製薬会社

の研究所勤務を経て、55歳のころから医学・薬学の翻訳を担当している。通勤の負担軽減などのため、現在は業務委託の形で、主に医学・薬学の英語論文の日本語の抄録の作成を担当している岸さんは「クライアントの期待に応えるために、可能なかぎり正確な抄録の作成を心がけています。仕事で論文を読んでいると、必ず新たな発見がありますので、それが楽しく仕事が続いています。仕事が苦痛に感じることがないうちは、この仕事を続けていきたい」と力を込める。岸さんは在宅勤務が中心だが、週1回は来社して、後輩の指導の役割もなっていると話す。

中島悟さん(68歳)は、契約業務のエキスパートとして新比恵社長をサポートするとともに、同社の総務・人事も担当している。「前社の総務部で契約関係を手がけていたことから、この会社に参加することにしました。とくにコンプライアンスには気を配っています

」と話す中島さん。中島さんは、「自分が働いたことに対して報酬が得られることに、年金とは違う働くことの喜びを感じます。体力と能力がともない、会社から必要とされるうちは、仕事を続けたい。趣味のコーラスで週1回の練習で声を出すことが健康にもよいようです」と笑顔をみせる。

齊藤亜紀良さん(63歳)は、高田さんと同様、自ら翻訳を手がけるほか、外部の翻訳者の翻訳のチェックを手がけ、さらに医学・薬学分野の翻訳者を養成するための講習会の講師も務めている。「現在も週5日のフルタイム勤務です。クライアントが求める期日を守るとともに、品質も絶対に落とさないことを自らに課しています。それなりにストレスを感じることもありますが、プロジェクトが終わったときが、仕事を続けてきてよかったと感じる瞬間です」と話す。東京支社の代表も務める齋藤さんだが、「スタッフがベテランぞろいなので、苦労はまったくありません」と柔らかな表情を見せる。